

来年度から問題が改善されるのか

－「問題作成の基本的な考え方」について

【学習資料】 2019. 3. 1

文科省は、全国学力テストについて、「問題作成の基本的考え方」（以下「考え方」とします）を示し、平成 31 年度からこれに沿って作成された問題を出すとしています。目的は、「各設問の正答率や誤答の状況から課題の有無を把握し、学習指導の改善・充実を図ることができるよう」にすることとあります。そのため、問題を、「特に、次の点に配慮して作成」するとして、いくつか改善点を述べています。（全国的な学力調査に関する専門家会議 第5回 配付資料 2018. 3. 16）

以下、「考え方」の中から3点取り上げ、検討を加えてみたいと思います。なお、小学校問題とその結果を中心に考えてみることにします。

1 十分に身につけた知識・技能、あるいは活用力を把握する？

「考え方」では、まず、知識・技能、あるいは活用力を十分身につけたかどうか把握するための問題を作成するとしています。

学習指導要領の理念・目標・内容等に基づくものとし、小学校の調査問題については、小学校第5学年までに、中学校の調査問題については、中学校第2学年までに、十分に身に付け、活用できるようにしておくべきと考えられるものを、各領域等からバランスよく出題すること。

では、これまでの全国学力テストの問題はどうだったのでしょうか。毎年、10%台あるいは20%台というきわめて正答率の低い問題が出されてきました。それも1問ではなく、少なくとも2問、多い年度は5・6問もあるというものでした。全国学力テストを受ける子どもたちにとって、大きな負担となった原因のひとつにこれがあります。

とりわけ、2016年度の算数Bでは、全国の小学校の平均正答率が7.0%と、考えられないような低い数値が出た問題がありました。このような低い数値の難しい問題となったわけは、学校では全く学習したことのないような問題内容と形式、そして解答方法だからなのです。大人でも解くことが難しい問題であったのです。

正答率が極端に低い問題の特徴をまとめると次のようになります。

- ・ 子どもたちの実態からかけ離れた問題設定となっている。
- ・ 問題文が長文となっており、読み取るのに時間がかかる。メモやグラフ・表、あるいは図と合わせて読み取ることが求められる。
- ・ 設問の趣旨を理解した上で、前のページにさかのぼって該当箇所を見つけなければならない。
- ・ 解答する子ども自身の考えではなく、問題に登場する主人公の考えをまとめる問題が多い。
- ・ 条件に合わせて記述することが求められる。国語では、条件の1つに、「〇〇字以上、〇〇字以内」という字数制限がある。算数では、立式すれば良いのにもかかわらず、わざわざ「ことばと数をつかって書きましょう」というような設問となっている。
- ・ これらを短時間で行うことが求められる。

できないのは子どものせいではなく、文科省の作成した問題にあったのです。それなのに、文科省は、できなければすべて「課題」であり、各学校で「授業改善」をするよう求

めてきました。文科省は、テストを受ける子どもたちに直接負担を与えるだけでなく、「授業改善」を通して学校教育に多大な悪影響を及ぼし続けてきたのです。

2 時間内にできる問題にする？

「考え方」では、「全ての問題に十分に取り組むことができるよう」、時間内にできる問題にするとしています。

児童生徒が、全ての問題に十分に取り組むことができるよう、問題の分量が調査時間(解答時間)に照らして適切なものとなるよう努めること。また、児童生徒の調査の負担に、より一層配慮すること。

では、今までの調査ではどれぐらい時間が足りなかったのでしょうか。年度ごとに、もっとも高い数値(一部、2番目に高い数値)をまとめてみます。(解答時間が「やや足りなかった」+「全く足りなかった」の割合)

2007年度	算数B	32.0%	
2008年度	国語A	43.6%	国語B 40.9%
2009年度	国語A	42.7%	
2010年度	算数B	37.4%	
2012年度	国語B	29.0%	
2013年度	国語A	48.4%	国語B 40.4%
2014年度	国語B	48.9%	
2015年度	算数B	35.6%	
2016年度	算数B	42.1%	
2017年度	算数B	46.9%	
2018年度	算数B	33.5%	

問題を解く時間が足りなくて、平均正答率が下がった、あるいは正確な「学力」が把握できなかったという問題にとどまりません。時間切れとなった子どもにとっては、どれだけ心を傷つけられたことでしょうか。文科省は、10年以上にわたって、毎年、調査の度に、子どもたちを傷つけ続けてきたのです。

3 子どもの負担を減らす？

「考え方」では、子どもの負担を減らすとしています。

また、児童生徒の調査の負担に、より一層配慮すること。

来年度から、中学校では英語調査が加えられるのですから、負担軽減とはなりません。

実は、2012年度、国語・算数に加えて理科が実施されるようになりました。その前に行われた理科の予備調査について、実施校から「負担が大きい」「2日間に分けて実施してほしい」などという意見が寄せられました。それにもかかわらず、文科省は理科を加えてしまいました。

文科省が本当に子どもの負担を減らそうというのであれば、全国学力テストを中止するしかありません。